

「求められるアナログ思考」を読んで

藤原 道夫

1月9日付け毎日新聞夕刊の「混迷の時代」というコラムに、石井洋二郎（東京大学名誉教授、元教養学部長）（以下石井氏）に取材した表記の記事が大きな見出しで載っていた。石井氏といえば、15年程前、さらに50年前の総長による「肥った豚になるよりも痩せたソクラテスになれ」という告辞を批判したことで知られている。それはさておき、教養の重要性を説き続けてきた氏による「アナログ思考」に惹かれて文を読んだ。

現代の混迷は深い。自然災害が牙をむき、戦乱が繰り返され、人々の命がたやすく奪われる。軍事用語でいう変動性、不確実性、複雑性、曖昧性に世界が覆われているようだ。石井氏は「今ほど、ものを考えることが重要なことはない」と力説する。とはいえ、基礎知識のないものに考えろといっても無理だ。氏は得られる情報を鵜呑みにするのではなく、疑いをもってできるだけ原典にあたり、正確な知識を得る習慣を身に付けよう、それが教養だという。この指摘も分るが、専門家でない人たちには容易にできない。可能な限りと理解しよう。

アナログというとレコードが思い浮かぶ。一部のマニアの間で温かみのある音が出ると愛用されているらしい。しかし今は、音源としてCDが圧倒的に多い。

石井氏は0から1に飛ぶデジタルではなく、アナログ的にその間のこともしっかり拾っていくことが重要だと指摘する。事の真偽を白か黒かはっきり表現する情報のみを信じるのではなく、中間的な事柄についても考えるように、と言っているのだろう。

石井氏は長年優秀な若者に向き合ってきた方だ。若者たちの情報が主にデジタル技術の最先端を行く SNS から得られている傾向が強まっていくことに警鐘を鳴らしてきた。偽情報も多く飛び交っている。「何もかも不確かであるからこそ、まずは過去の人が何を考えてきたかを書物などで知ってほしい」という主張は納得できる。AI などデジタル技術が進化し、利用が進んでいく中で、アナログ思考を理解し実践できる若者が育てて欲しいものだ。